

[看護学]

[資料]

子育て支援にかかわる母子保健推進員の思い

子育て支援に関わる母子保健推進員の思い

安成智子*1・佐藤美幸*1

(*1 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科)

The Consideration of Maternal and Child Health Volunteers in Japanese Child Care Support

Tomoko Yasunari*1 and Miyuki Sato*1

(*1 Department of Nursing, Ube Frontier University)

日本の母子保健推進員(以下、母推と省略) 制度は、地域で子育てをする母親への育児支援において、行政とのパイプ役としての機能と身近な相談相手としての役割を期待されている。

地域で育児サークルを主宰している母推 10 名を対象に、母推活動や子育てへの思いについて明らかにすることを目的として本研究を行った。実施にあたっては宇部フロンティア大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。半構成的面接にて得たデータを質的帰納的に分析した結果 16 のサブカテゴリが抽出され、それらは [母推活動への思い] [自分が経験してきた子育て] [お母さんたちへのまなざし] の 3 カテゴリに収束した。

母推の活動には自らの子育て経験や苦勞が活かされており、使命感を持ちつつ活動そのものを楽しんでいた。現代の母親に対しては、子育て環境の変化を前提に肯定的な見方をしており、保健師と連携を取りながら母親を支える母推の役割を果たしたいという思いを持っていた。

キーワード：母子保健推進員，母子保健，子育て支援

Keyword: Maternal and Child Health Volunteers, Maternal Child Health, Child Care Support,

1. はじめに

少子化が続き地域全体での子育て環境が整わない中、母親たちは、迷いの多い孤独な育児を強いられている。

そうした中では、母子保健推進員(以後「母推」とする)が母親たちの育児支援に対して一定の役割を果たしている。行政から委嘱された母推は、母親と行政とのパイプ役として家庭訪問や地域の育児サークルの運営、また身近な相談相手として地域で活動しており、地域の母子保健にとってなくてはならない存在となっている。50歳代以上の既婚女性が多く職業を持ちながら母推を担っている人も4割以上である¹⁾ことが明らかとなっている。母推の多くは「多くの人と知り合える」「自分自身が成長できる」など、活動を肯定的に受け止めているが、「責任が重い」「活動内容が難しい」と困難を感じる者もいた²⁾。しかしながら、母推自身の

子育て経験を背景にした意識や価値観、思いを明らかにしたものは見られない。

本研究は、母推個人の経験を背景とした思いに焦点を当てるものである。

2. 研究目的

母推自身の子育てについての個人的な体験を背景とした思いや、活動に関する問題意識を明らかにする。

3. 研究方法

3.1. 研究対象者

X市内Y地区で未就学児の親への育児支援サークル(『つどい』と仮称)を主催している母推に研究協力を依頼し、同意が得られた者を研究対象者とした。

[看護学]

[資料]

3.2.データ収集・分析方法

2018年7～9月に研究者の研究室において半構成的面接を行った。母推活動への思いや母推自身の育児経験に関する内容をインタビューガイドに基づき聞き取った。承諾後に録音した面接内容から作成した逐語録を質的データとし、類似性と異質性を基に比較検討しながらデータからコード、サブカテゴリ、カテゴリへと抽象度を上げて質的帰納的に分析した。複数の看護学研究者によって検討を重ね分析の妥当性を確保した。

3.3.用語の定義

本研究では『つどい』の参加者で母推らと顔見知りの女性を「お母さん」と表記し、『つどい』とは無関係の一般的な子育て中の女性を「母親」とした。

4. 倫理的配慮

本研究は宇部フロンティア大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(管理番号18004)。対象者には、研究の目的・方法・期待される結果と、対象者にとっての研究協力に関する利益と不利益を伝え、自由意思による研究参加の保証ならびに医療関係の学会等での公表について文書と口頭で説明し、同意を得た。

5. 研究結果

59～76歳(平均66.6歳)の母推10名が研究対象者となった(表1)。全員に子育て経験があり、平均子ども数は3.0名であった。子どもらは現在20代後半から50代である。母推の経験年数は、5年未満が4名、5年以上10年未満が3名、10年以上が3名であった。

表1 対象者の概要

	本人年齢(歳)	母推経験年数(年)
1	60代	5年以上10年未満
2	60代	5年未満
3	70代	5年未満
4	50代	5年未満
5	70代	10年以上
6	60代	10年以上
7	60代	5年未満
8	60代	10年以上
9	60代	5年以上10年未満
10	60代	5年以上10年未満

分析結果としては、49コードから16サブカテゴリが抽出され、それらは[母推活動への思い][自分が経験してきた子育て][お母さんたちへのまなざし]の3カテゴリに収束した。カテゴリを〔 〕、サブカテゴリを《 》、コードを〈 〉で表示し、研究対象者の語りは「 」で例示した。強調部分は必要に応じて『 』と表示し説明を加えた(表2)。

1) [母推活動への思い]

母推自身の『つどい』の活動への思いが多面的に語られた内容を示し、7サブカテゴリから構成された。

(1) 《地域活動の一つとしての「母推」》

対象者全員に民生委員やPTA・子ども会役員、学童保育の補助員など、母推以外の多種多様な地域活動経験があった。その多くに「何かで地域の役に立ちたい」「自分にできるなら」と、地域で「役に立ちたい」との思いがあった。子育てを経験し時間的余裕もある自分が〈母推に適任であることを自覚〉もしており、使命感から活動に加わった者もいた。

「特に断る理由がない」と始めた者にも、「家にも仕方ない」「家にいるより楽しい」と〈その人なりの意味〉が見られた。

(2) 《活動から得られるもの》

最も多い活動への評価は〈活動そのものの楽しさ〉であり、「キラキラと育っていく輝き」「生命体が輝いている」と〈子どもの輝きへの感動〉に魅了されている者も見られた。「知らなかったことを知れる」という知識欲や「社会とつながりたい」という所属の欲求も満たされ〈人や社会とつながっている感覚〉が得られていた。

(3) 《続けている理由》

「人が好き」で「話をするのが楽しい」という発言から〈人と関わることが好き〉な外向的な性格の者が見られた。加えて〈活動そのものの楽しさ〉や〈子どもが好き〉な気持ちも活動継続に関与していた。

一方、「ゆるい拘束力」で「負担が少ない」「家庭優先でできる」活動でもあるため、断る理由もなく継続できていた。

(4) 《後継者の育成を考える》

後継者の育成や世代交代については「少しずつ退こう」と〈引き際を意識〉しており、後継者が育つまでは「古株は口を出さない」で〈後ろから見守る〉姿勢を心がけ、〈若い方に入ってほしい〉と希望していた。

(5) 《責任の重さを感じる》

〔看護学〕

〔資料〕

母推は〈個人情報を知り得る立場〉にあり、『つどい』は〈命を預かる仕事〉でもあることから「責任の重さ」が意識されていた。責任を果たすために「自分が健康でいなくては」との意識から〈健康維持への動機づけ〉が高かった。責任と同時に負担も感じており、「赤ちゃん訪問は大変」との自覚もあった。

(6) 《役割への自覚と葛藤》

母推の役割は〈とにかく聴くこと〉との自覚があり、『つどい』の場を「楽しく」「きっかけ作りの場」となるように整え〈お母さんの居場所を作る〉ことに注力していた。その一方で『つどい』に参加しないお母さんのことは多くの母推が気にかけており、〈出てこない人こそ気になる〉と感じながらも、「どこまで踏み込んでいいのか」と葛藤を感じていた。

(7) 《保健師との連携が母親を助ける》

委託された新生児訪問を行う母推も多かったが、その際「気になる子どもや手に負えないケースはすぐ保健師に報告する」と述べ、「昔の育児と変わったこと（離乳食、果汁）」「体重増加」など、子どもの身体的健康に関わるアドバイスは〈保健師につなげる〉と認識していた。対応に迷う「難しい」母子であっても、「報告すると保健師が訪問してくれる」ため、〈保健師が対応してくれることに安心感がある〉と考えられた。

2) [自分が経験してきた子育て]

自分を振り返った時の経験や思いを通して見出した5サブカテゴリで構成されていた。

(1) 《恵まれていた子育て環境》

親や近親者から〈同居や近居で得られたサポート〉があり「実に幸せな嫁だった」との感謝が見られた。現代の育児に多い『親の孤立』についても、「(自分は)一人で悩むことはなかった」と述べている。

近隣や友人などの〈善意の人たちに恵まれ〉、「とても幸せ」と述べていた。夫が時に仕事を投げ出して駆けつけてくれたことや、母子以上に深い父子関係を築いていることについて「いざというときに行動を起こしてくれた」「父親と母親の力は違う」と述べ、〈要所所で夫の支えがあった〉と評価し、感謝している様子もあった。

(2) 《孤独な育児》

核家族で、さらに夫不在での育児を〈孤独な育児〉で「母子家庭のよう」だと訴え、〈ぽつんと(社会に)置いて行かれているよう〉な感覚をもつ者もあった。

親には〈大変さ(高齢・忙しい)を思うと頼れない〉と感じ、だからこそ自力で頑張ろうとする姿勢があった。

その時代の「母推活動を知らなかった」という人がほとんどであり、質実ともに現在とは異なるサポート環境であったことが伺われた。

(3) 《まんざらでもなかった私の子育て》

自身の子育てには「反省も多々ある」や、「上出来じゃなかった」「合格点はなかった」など一見否定的な表現もあったが、その後に「紆余曲折あったけど」「あれはあれでよかった」とも述べており、〈失敗も反省も含めて評価〉していると考えられた。誇りや自負も感じており「まんざらでもなかった」と評価していた。

(4) 《子育てを通して親自身が成長した》

子育てを通して「なるようになる」と思えるようになり、「世間はそんなに冷たくない」ことにも気付いた。そうした変化を〈子どもが育ててくれた〉と感じ、親自身の成長を示唆していた。

(5) 《サポートされる側からする側へ》

現在のお母さん達を「昔の自分に似てる」と感じるためか、自分がサポートされていた時のように〈つかず離れずのサポート〉や〈遠目で見てあげる人〉の必要性を感じていた。特に〈時代が違う〉ため「押し付けるのはいけない」と自戒しお母さん達の考えを尊重する姿勢を見せていた。それは、サポートする側の人間として接する際の態度を示すものであった。

3) [お母さん達への眼差し]

母推がお母さん達に向ける眼差しを示す4サブカテゴリで構成されていた。

(1) 《時代が違う中での子育てを見守る》

自分の育児時代よりも「今のお母さん達は楽しそう」と感じ、「(自分が若かったら)彼女と友だちになっていたのに」と賛辞を送る者もいた。現在の「新しいやり方」を受け入れ、〈昔の子育てはあてはめられない〉と納得した上で見守る姿勢が見られた。

スマートフォンの活用を〈何でも調べられるいい時代〉だと肯定的に受け止める一方で、『スマホばかり見ている育児』にだけは「どうしても目につく」「子どもに向き合っていない」との非難が明確に示されていた。

(2) 《頑張って子育てしている》

「離乳食作りが丁寧」で「しっかりしている」お母さん達を〈まじめに、前向きに取り組んでいる〉〈上手に子育てしている〉と肯定的に捉えていた。〈夫婦で育てることを前提とした工夫〉の多さに、「夫婦でよく話し合っている」と感心した意見があった。

(3) 《お母さんの気持ちに寄り添う》

表2 母子保健推進員の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
母推活動への思い	《地域活動の一つとしての「母推」》	地域の役に立ちたい／立つべきとの思い 自分が母推に適任であるという自覚 地域活動にその人なりの意味がある
	《活動から得られるもの》	活動そのものの楽しさ 子どもの輝きへの感動 人や社会とつながっている感覚
	《続けている理由》	人が好き・人と関わることが好き 活動そのものの楽しさ 子どもが好き・可愛い 負担感が少ない
	《後継者の育成を考える》	自分の引き際を意識する 口出しをせず後ろから見守る 若い人に入ってほしい 具体的な運営方法を考えたい
	《責任の重さを感じる》	個人情報を知り得る立場 命を預かる仕事 自分の健康維持への動機づけが高まる 「大変で嫌な」仕事もある
	《役割への自覚と葛藤》	お母さんの居場所をつくる 地区全体を育てるつもりでやってきた とにかく聴いてあげる場だが、言ってあげた方が良いのか 出てこない人こそ気になるが、どこまで踏み込めばいいのか
	《保健師との連携が母親を助ける》	対象を選んで保健師につなげる 保健師が対応してくれることに安心感をもっている
自分が経験してきた子育て	《恵まれていた子育て環境》	親との同居や近居で得られたサポート 核家族でも、善意の人たちに恵まれた 要所要所で夫の支えがあった
	《孤独な育児》	母子家庭のよう ぼつんと社会に置いて行かれているよう 親の大変さを思うと頼れない
	《まんざらでもなかった私の子育て》	失敗も反省も含めて評価する 紆余曲折あった子育てを受け入れる 子育てを楽しませてもらった それでも人並みに育ってくれた 謙遜をこめて表現している
	《子育てを通して親自身が成長した》	ものの見方や考え方が変わった 子どもが育ててくれた
	《サポートされる側からする側へ》	つかず離れずのサポートが大事 遠目で見えてあげる人が必要
お母さんたちへの	《時代が違う中での子育てを見守る》	何でも調べられるいい時代 『スマホばかり見ている育児』にだけは否定的 昔のやり方はあてはめられない
	《頑張ってる子育てしている》	まじめに、前向きに取り組んでいる 上手に子育てしている 夫婦で育てることを前提とした工夫
	《お母さんの気持ちに寄り添う》	『していること』ではなく『感じていること』 出てこられない気持ちを受け入れる
	《お母さんに伝えたいこと》	母親自身の後悔の裏返し 危惧を反映した思い

お母さん達の「孤独」や「情報が欲しい」気持ちを推し量り、特に気になる「つどいに出てこない人たち」の〈出てこられない気持ちを受け入れる〉ことを重視していた。出てくるための「きっかけがつかめないので

〔看護学〕

〔資料〕

だろう」と考え、『つどい』や新生児訪問をそのきっかけにしてくれると良いと述べていた。

(4) 《伝えたいこと》

お母さん達に伝えたい思いは、「子どもには手をかけるべき時期がある」「しっかり抱っこしてあげて」など様々であった。これらは、現代の子どもの「遅しさ」や「生きていく力」への〈危惧を反映した思い〉であり、〈母推自身の後悔の裏返し〉でもあった。

6. 考察

〔母推活動への思い〕

対象者全員が母推以外の地域活動でも役員経験があり、地域の役に立ちたいという意識から、抵抗なく母推活動に携わることができていた。また「孫育て」が祖母に元気であるという自覚を持たせ心身の健康に寄与している²⁾ことから考えると、母推活動は、母推自身にも良い影響を与え得る。

保健師との間には〈対象を選んで保健師につなげる〉という連携があり、母推の手に負えないケースに専門職としてフォローする保健師への信頼感があった。両者間の信頼関係により、母推にも過剰な心理的負担感がなくなるものと考えられる。

対象者の平均年齢が60代後半であることから、母推の世代交代や後継者育成も意識されていた。ある行政区では、母推を公募した結果、活動に熱心な若い世代の母推が増えている事例³⁾もある。若い後継者の獲得・育成には、より組織的で長期的な視点を持った介入が必要であろう。

〔自分が経験してきた子育て〕

対象者らが子育てをしていた時代は、日本の高度経済成長期の終わり頃であり、「育児不安」の問題が顕在化し社会問題として注目され始めた⁴⁾頃でもある。対象者らもまた手探りの中で育児をし「孤独な育児」に悩んだこともあるからこそ、現代の母親の環境に共感し、〈つかず離れず〉〈遠目で〉見守る姿勢が生まれてきたのではないだろうか。

祖母自身の子育て経験をもとに孫育てが行われている²⁾ことと同様に、母推らの子育て支援も、自身の経験が支援に活かされていると考えられた。エリクソンによる「世代継承性」は、自分がこれまでに世話をされたという経験を次の世代に継承していく⁵⁾ことで発揮することができる。成人期後期から老年期にかかる対象者らにとって、サポートをする側になることは、母推ら自身の課題の達成から考えても有意義なもので

あろう。

〔お母さんたちへの眼差し〕

お母さん達の子育てに対しては肯定的・好意的な見方が大半であり、「なんでも調べられるいい時代」の子育てを〈見守る〉姿勢が取られていた。母親の『していること』ではなく『感じていること』に寄り添おうとする母推らの姿勢はお母さん達にとって受け入れられたという安心感につながるものであろう。

井関ら⁶⁾によると、里帰り分娩の娘に対する実母の支援姿勢も本研究における結果と類似しており、実母は『専門知識や最新の育児情報に価値を置く』ことを肯定的に見ていた。しかし本研究の対象者らは『スマホばかり見ている育児』にだけは批判的であった。井上ら⁷⁾によると「長めの映像を見る」母親に、子どもへの否定的感情が高い傾向にあったと報告されているが、対象者らはこうした『スマホ育児』の欠点を経験的に感じ取っていると考えられた。

現在、6割以上の者が授乳時にテレビなどの視聴やスマートフォン等を使用している⁷⁾ことから、今後も育児行動とスマートフォンが切り離されることはないと考えられる。現状に否定的な眼を向けるだけでなく、どのような支援を要するのかを注意深く見守る必要がある。

7. まとめ

母推の活動には自らの子育ての経験や苦労が活かされており、その経験があるからこそ、サポートをする側としてお母さんへの好意的なまなざしを向けることができていた。一方で「気になる」母親については保健師との連携を深め、迅速かつ的確に対応を考えていく重要性を認識していた。

8. 引用文献

- 1) 當山裕子：沖縄県内で活動する母子保健推進員の活動意識，沖縄の小児保健，39，pp13-18，2012.
- 2) 津間文子：祖母の思う「孫育て」が祖母自身に及ぼす影響—子ども世代に対する子育て支援—，母性衛生，53(4)，pp573-582，2013.
- 3) 本田光，下地由美子，仲宗根美佐子：母子保健ボランティア組織による「乳児全戸家庭訪問事業」の活動実態とその充実感，沖縄の小児保健，37，pp65-71，2010.
- 4) 上野恵子，穴田和子，浅生慶子，他：文献の動向から見た育児不安の時代的変遷，西南女学院大学紀要，

〔看護学〕

〔資料〕

14, pp185-195, 2010.

5) 斎藤幸子, 宮原忍, 近藤洋子: ジェネラティビティを上位概念とした次世代育成力に関する研究—少子化の根底にあるもの—, 母性衛生, 51 (1), pp180-188, 2010.

6) 井関敦子, 南田智子, 大橋一友: 里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い, 母性衛生, 54 (1), pp191-199, 2013.

7) 井上千晶, 大平光子, 橋本由里: インターネットリサーチによる授乳時のスマートフォン等使用に関する調査—テレビ・スマートフォンへの親近感とボンディングとの関連—, 日本母性看護学会誌, 19 (1), pp57-64, 2019.